

伊豆の国の旅館に開館

実篤没後30年 記念の文学館

白樺派を代表する作家、武者小路実篤が20数年にわたって通い詰めた伊豆の国市長岡の旅館「実篤の宿 いづみ荘」に7日、没後30年を記念した「伊豆武者小路実篤文学館」が開館し、記念式典が開かれた。

大女将の渡辺聖代さん(84)によると、初めて実篤がいづみ荘を訪れたのは、1926年(昭和元年)ごろ。持病の神経痛が悪化し、知人に伊豆長岡温泉を紹介されたのがきっかけだった。

温泉の効き目は抜群で、神経痛が完治したといい、以来、20数年にわたって訪れ、長いときには、半年間も滞在したという。

もとは旅館内のスナックだった場所を改装してオープンした「文学館」は約30平方メートルの広さで、実篤が滞在したときに描き残した自画像や野菜の絵など約30点を展示している。

実篤をもてなした渡辺さんは、「先

「愛と死」執筆の場所

生は一見、すかしているようだが、ちゃめっ気があって、温かみのある方でした」と作品を見ながら、当時を振り返った。

この日は実篤の三女辰子さん(77)と辰子さんの夫の穰さん(85)、

孫の惟さん(26)がいづみ荘を訪れ、「思い出がたくさん詰まっ

て泣いてしまい、原稿に涙のあとが残っていたそうです」などと、懐かしそうに語っていた。

「文学館」は午前9時から午後8時半まで。茶菓子付きで大人500円、小学生以下300円。宿泊者は入館無料。問い合わせは、いづみ荘(055・948・1235)へ。

た場所に文学館をつくって頂き、本当にお礼を言いたい」とオープンを喜んだ。

辰子さん

は父親の代表作「愛と死」が、この旅館で執筆されたことを思い出しながら、

「主人公が死んでしまう場面を書いた時は悲しく



展示品をながめる(右から)辰子さん、穰さん、渡辺さん



開館した文学館で、武者小路実篤の書画などを見つめる三女の辰子さん(白)や大おかみの渡辺麗代さん(左)＝伊豆の国市長岡のいづみ荘で

武者小路実篤が滞在 旅館に文学館開館

伊豆の国、書画など30点展示

「友情」「愛と死」など知られる作家・武者小路実篤(1886―1970)が滞在した伊豆の国市長岡の旅館「いづみ荘」に7日、「伊豆武者小路実篤文学館」が開館した。没後30周年を

記念した事業で、実篤が書き残した書画など約30点が展示されている。三女の辰子さん(白)も東京都小金井市から駆けつけて開館を祝った。

大おかみの渡辺麗代さん(左)によると、実篤が最初にいづみ荘(当時「其家館」)を訪れたのは大正14年前後。神楽の神経痛が悪化して動けなくなり、知人に伊豆長岡温泉を勧められたのがきっかけという。

実篤は「不思議に効果があり、余治したので、それから殆んど毎年出かけることになっている」と直筆の文で紹介。以享二十数年にわたって長岡温泉を愛した。代表作「愛と死」もこの旅館で執筆した。「主

人公が死ぬ場面を書いた時には、原稿用紙に涙を滴していた」と麗代から聞いています」と麗代さんは人柄をしのぶ。文学館はスナックを改装し、広さ約30平方メートル。実篤が麗代さんらに贈った書画を中心に飾っている。

辰子さんは「愛と死」が完成したのは、父を大事にしてくれた旅館の担当。立派な文学館を造ってくれて、お礼を申し上げたい」と話した。入館料は大人500円。小学生以下300円(茶、菓子付き)。無休。問い合わせは、いづみ荘(0556・948・1236)へ。



落成式に駆けつけた実篤の三女辰子さん（中央）。左端は大おかみの聖代さん＝伊豆の国市のいづみ荘で

実篤の書画や遺品展示

伊豆の国 ゆかりの旅館に文学館

白樺派の作家武者小路実篤（一八八五―一九七六年）とゆかりの深い伊豆の国市長岡の温泉旅館「いづみ荘」（渡辺久芳社長）で七日、「伊豆・武者小路実篤文学館」の落成式があった。

没後三十年を記念し、実篤の業績と人柄を知ってもらおうと、約百五十点の資料を展示した。文学館は館内のスナックを

改装したもので、広さは約三十五平方メートル。ガラス越しに直筆の書画や写真、実篤の全集、愛用していた文鎮や茶わんといった遺品などが並ぶ。

実篤が同館（当時の名称は共栄館）を訪れたのは一九二六（昭和元）年ごろ。神経痛が悪化し、友人に勧められたのがきっかけという。以来、長年にわたり長岡の温泉や

人々を愛し、多くの作品を世に出した。長岡の温泉について、実篤は「不思議に効果があり、全治したので、ほとんど毎年出かけることにしている」と評している。

実篤と親交のあった大おかみの渡辺聖代（きよ）さん（八四）は「一見すましているようで、ちゃめつけがあつて、思いやりのある方でしたね」

ゆかりの旅館に

文学館オープン

大正から昭和にかけて活躍した文豪・武者小路実篤の没後30年を記念して、実篤が滞在したことで知られる伊豆の国市長岡の温泉旅館「いずみ荘」館内に7日、「伊豆・武者小路実篤文学館」がオープンする。実篤の世話をしたと

もあるという大女将の渡辺聖代さん(84)が所有している直筆の書画など貴重な品々を展示、実篤の世界をクローズアップする。

実篤は大正14年前後、持病の神経痛のため沼津で静養中だった。その神経痛が悪化し、動けなくなったときに知人に勧められたのが長岡温泉のいずみ荘(当時は共栄館)だったという。

実篤は「(長岡の温泉は)不思議に効果がある」と、同温泉から多くの小説や絵画を世に送り出した。

り、全治したので、それからほとんど毎年出かけることにしている」と直筆の文章で紹介。以来、二十数年にわたって長岡温泉を愛した。1年の半分は共栄館で過ごし、たほどだった。そして長岡温泉から多くの小説や絵画を世に送り出した。



直筆の書画などがずらりと並べられる武者小路実篤文学館
伊豆の国市長岡

直筆の書画など エピソードと共に

菊池寛賞を受賞した代表作「愛と死」も長岡温泉で書かれた作品のひとつ。聖代さんによると、実篤は主人公が死んでしまう場面を執筆した日に、目を赤くして泣いていたという。そして何も関係のない共栄館の墓石に向かって線香を手向け長い間、涙を流したといわれている。聖代さんは「先生の優しいお人柄が色濃くうかがえる一幕だったと、先代から聞いている」と話す。

文学館は館内のスナックだったスペースを改装。聖代さんが所有している書画のほか、実篤の全集、実篤が愛用していた文鎮や筆置といった遺品などがずらりと並ぶ。オープン当日は、実篤のまな娘で三女の辰子さんもお祝いに駆けつける。旅館の主人で聖代さんの息子である渡辺久芳さん(50)は「実篤の作品は没後30年を経ても新鮮味がある。改めてその良さを再認識してもらえたら」と話している。

入館料は大人500円、子供300円(茶、菓子付き)。問い合わせは「いずみ荘」055・948・1235。

武者小路実篤 没後30年…伊豆の国 長岡温泉

ゆかりの宿に文学館

武者小路実篤の業績しのぶ

大正・昭和にかけて活躍した「白樺派」の作家武者小路実篤（一八八五—一九七六年）が滞在したことで知られる伊豆の国市伊豆長岡温泉の旅館「いづみ荘」に七日、「伊豆 武者小路実篤文学館」がオープンした。東京都から実篤の三女武者小路辰子さん（中）が招かれたほか、同市内の行政、観光関係者約八十人が集まり、待望の記念館の完成を祝った。

実篤は昭和元年ごろに神経痛の治療で共栄館（現いづみ荘）を訪問。その後伊豆長岡温泉と同館を愛し、二十数年にわ

伊豆長岡温泉「いづみ荘」

たり同館に通い続けた。長い時は一年の半分を過ごし、菊池寛賞受賞の代表作「愛と死」も同館で執筆した。

以前から、実篤ゆかりの同館に記念館を「と宿泊客などから要望があり、今年実篤の没後三十周年を迎えたこともあって、「ぜひ多くの人に実篤について知ってほしい」（渡辺久芳社長）と文学館を開設した。館内のサロンのスペースを改装し、実篤直筆の書や絵画、写真など約三十点を展示。同館で実篤が描いた自画像や、掛け軸に野菜の絵とともに書いた書「勤労生活は美しき哉」など、作品からは実篤の実直な人柄がにじむ。

娘の辰子さんは「父はこの旅館の皆さんにお世話を受けて作品を書いた。このような記念館を作っていただいて、本当にありがたい」と感慨深げ。当時実篤の世話をしたという大女将の渡辺聖代さん（八四）は「先生が部屋に原稿を散らかしたまま散歩に行ってしまう、私が原稿を片付けたこともありました。先生が元気に歩いている姿を今も思い出します」としみじみと往時を振り返った。

直筆の書、自画像など30点



記念館で実篤の思い出を語り合う三女の辰子さん（中）と大女将の渡辺さん（左）＝伊豆の国市長岡のいづみ荘

同館は年中無休で、開館時間は午前九時から午後八時半まで。問い合わせはいづみ荘へ電055（9400）1235へ。